

## 海外情報 中国 ネットで14の「低俗語」使用を禁止 伝統メディアの見出しにも登場



北海道大学大学院  
准教授

シラ  
ル  
茹  
菊

香港の有力紙「明報」が7月2日報じたところによると、中国当局の関係部門は低俗と見なされるネット上の14の用語の使用を禁止した。この措置により、公式に認可されているインターネットメディアや新聞・雑誌などの紙メディアから、これら低俗な用語が締め出されることになる。このニュースはたちまち、全世界の中国語のウェブサイトに転送され、大きな反響を巻き起こした。

多くの人は、この措置は中国政府による新たな言論統制の動きではないかと警戒を強める。北京外語大学のメディア研究者、喬木氏は明報に「インターネットはもともと軽薄短小な文化だから、エリートが独占してきた伝統文化を打破する側面がある。大衆がネットにアクセスし、会話を始め

れば、下品な言葉、スラングが多くなるのは必然だ。そうになると、メディアは低俗語を使うという声が出てくるのも自然の流れだろう」と語る。ただ、喬氏は「公権力が介入して浄化を行うのは、断固として反対する。低俗を理由にネット用語の規制を許すと将来、政治的などといった理由で言論の規制にも乗り出す恐れがあるからだ」とも述べる。

### 低俗語の氾濫は中国の特色？

インターネットという新メディアが品位のない低俗表現を生み出す場となっているのは、世界的な現象だろう。中国もその例外ではなく、むしろより過激で、新聞や雑誌など既存メディアにも広がりつつある。何らかの浄化作用は必要だが、政府が直接乗り出すところに中国の特色がある。

共産党中央宣伝部も政府もまだ、公式にはネット浄化の指示を発表していない。だが6月2日、国家インターネット情報弁公室の指導の下で、ネット上の用語の浄化をテーマにした討論会が開催された。席上、党機関紙「人民日報」傘下のネット研究機関「人民網（ネット）輿情監測（世論情況監視）室」は、「ネット上の用語の低俗化が突出しており、さらに既存メディアにもまん延しつつある」と報告し、その規制と管理を呼び掛けた。

この報告は、25の低俗語について2014年1年間の使用状況を紹介している。それによると、微博（中国版ツイッター）上で1000万回以上のツイートがあった低俗語は16語、1億回以上ツ

weetされた低俗語が4語あった。さらに中国語の新聞、雑誌を検索してみると、何とそうした伝統メディアの見出しの中にも、低俗なネット用語が使用されていた。よく使われているのは、「屌絲」（ディアオス）、「逗比」（ドゥービー）、「叫獸」（ジャオショウ）の3語である。「屌絲」と「逗比」はもともとペニスとワギナに関係する言葉だが、前者は身分が低く、平凡で風貌のパツとしない若者を意味する言葉に転化。背が高く金持ちのイケメンに対して自嘲する時にも使われる。「負け犬」といったニュアンスもある。

後者は「超ウケ」非常に面白い人」という意味で使われている。「叫獸」は中国語の発音が「教授」と同じで、「アカハラ」（アカデミックハラスマントの略）や「セクハラ」、そして堅物の教授たちをちやかす際に使われる。

今年3月に開かれた全国政治協商会議の文芸界分科会で発言した著名な映画監督、馮小剛氏はノベル賞作家、莫言氏が「屌」という字の使用はやはり抵抗があり、代わりに「×」を使った」と述べたというエピソードを紹介。「屌絲」を使って自身を表現することはあまりにも自虐的で、下品な言葉遣いだと自身のツイッターでも批判している」と述べた。

### 低俗か、弱者の知恵か？

もともと下品な言葉は下層社会で造語され、多くは生殖器や性行為の卑俗な表現といわれる。他者を攻撃し、罵倒する際にも用いられ、暴力性に満ちている。先に紹介した報告によると、ネット

上の低俗語が生まれた主要なルートの一つは生活の中で生まれた俗語がネット上で変形され、広範囲に広まっていったという。例えば「草泥馬」は中国語の中で最も典型的なのしり語である「操你媽（くそつたれ！／お前の母さんをやっちまうぞ）」と同じ発音である。当初、ネット上で使用されると、さすがに抵抗感があった。すると「南米のアルパカのような、想像上の動物だ」との説が流布され、抵抗感が和らぐと、今度はネット利用者が悪ふざけでどんどん使いだし、政府に対する不満や対抗心まで表すようになった。さらに新聞、雑誌の見出しにまで登場するようになる。ネット上の新語だが、想像上の動物を指す元からの言葉と錯覚している人もいるほどだ。

このような言葉が続出する背景には、社会に格差やひずみがあると言えよう。例えば「屌絲」には、政財界の二世や金持ちに到底かなわないという劣等感が重なる。人々は自由に発言できるインターネット空間を利用し、その知恵を大いに発揮して、意図的に下品な言葉の同音文字などを駆使し、「創新」を繰り返している。自嘲語であれ、他者を罵倒する言葉であれ、へそ下三寸の卑猥語がネット上で加工され、組み合わせられ、包装されて拡散。堂々と新聞やテレビなどの伝統メディアにも登場し、一種の流行現象になっているのだ。筆者は周辺の留学生になぜそんな言葉を使うのかと尋ねてみたが、「あんまり意識していません。ブログやツイッターでみんなが使っていますから」という答えが返ってきた。もし若いインター

ネット世代が頭を使わず、ネット上の流行をそのまま受け入れていたら、喬木氏が語るように「下品な言葉が広まるのは自然」ということになる。それは大衆感情の発露でもある。しかし、伝統メディアまでもがそれでいいというわけにはいくまい。伝統メディアには物事の是非を判断するゲートキーパー機能がある。特に中国のメディアは、一貫して党が付与した社会的責任を担っているはずだ。にもかかわらず商業メディアだけでなく、党の機関紙メディアや微博の公式アカウントまでもが使用するのは、何という皮肉なことだろう。

本欄では中国のメディア融合戦略を紹介してきた。すなわち政府は、伝統メディアがインターネット空間に進出し、ゲートキーパーとしての役割を發揮するのを期待している。ところが、現実にはネット空間の流行に流され、のみ込まれ、ただ遅れまいと響きの良い新語を使用するばかりである。メディア融合の代表格である「澎湃ニュース」であれ、政府の「喉と舌」であるはずの人民ネット、新華ネットであれ、例外ではないのだ。

しかし、人民ネットの報告が公表されてから、伝統メディアは相次いでネット上の低俗語を断固絞め出すと表明している。党中央宣伝部が運営するウェブサイト「中国文明ネット」にアップされた評論は、「ネット上の言語は浄化されねばならない。まず、規範となる言語を使って誘導する。特にネットメディア、伝統的な紙媒体は厳格に審査する必要がある。またネット論壇では、低俗語はアップロードされないような装置を設け、低俗

語がはびこる土壌をなくし、次第に消滅させなければならぬ」と呼び掛けている。

### いつまで続く政府の規制

それについても、こうした措置は昔から行われてきたが、決め手がなく長年にわたって手をこまねいてきたのではなからうか。喬木氏は公権力の介入に断固反対している。実際、私も公権力の介入で問題が根本的に解決できるとは見ていない。

09年、政府の多くの部門は連合して、インターネットの低俗化を絞め出す専門的な措置を展開した。しかし、ネット利用者の間では、「草泥馬」は政府の規制をくぐり抜けた発明であるとか、中国の弱者の武器であるとさえ、たたえる者がいる。14年下半期、改めてネット上の低俗語の一掃を呼び掛ける声が専門家から出たが、ネット上では「ネット用語は広範なネット利用者の共同努力の成果であつてどのように発展させるかについて専門家が干渉したり、ああしろこうしろと指示したりする権利はない」と盛んに論議された。

7月4日、新華社通信は政府の命を受け、「積極的に『ネットプラス』行動を指導推進する意見」を配信。インターネットは中国経済の各領域との融合を加速化させることになった。現在47・9%のネット普及率は今後さらに高まっていくだろう。だが、このようなネット大国で、政府はいつまでネット空間の浄化を管理、規制するのだろうか。各人が真剣に自律に努めないと、下品な言葉がいつまでもはびこることになる。